

教室の改革からはじまる —その戦略

西原清一

システム情報工学研究科教授

‘世界に通じる学生を育てるための戦略’はあるのか。その前に、教員自身が、そして大学自体が世界に通じるように努めることが先なのでは？という意見が来そうである。ならばまずは自分自身の反省から始めるべきかもしれないが、それに付き合っ下さる方がいるはずもない。というわけで、ここでは、せっかくの機会なので、日ごろ感じていることに絡めて、いくつかの戦略を提案させていただきたい。‘戦略’という以上は具体的に、しかし紙幅に納まるようにと心がけるつもりなので、表現が断定的になってしまうことはお許しください。

1. ある日の教室

今年度1学期初めのある日、講義のために昨年度と同じ教室に入っていった。持って行ったハンドマイクをセットして、スイッチを入れたが、音が出ない（やっばり？）。教卓を叫いたりゆすったりしてい

ると突然、なんと教卓の天板が台座からはずれてしまった。学生が笑う。その瞬間、昨年もまったく同じことが起こったことを思い出した。支援室に行って念のため電池を入れ替えて、今度は学務担当の人と一緒に教室に戻った。「接触が悪いのかも知れませんが」と言いながら、少しいじってもらったら、すぐに音が出た。次に黒板に取り付けられているチョークボックスを引っ張ったら、奥のストッパーが壊れていて、中のチョークごと粉と一緒に教壇に散らばった。そうだそうだ、右のボックスは壊れていたんだ。次は、OHPを使おうとしたら、何が入っているのか知らない鍵のついた大きい箱があり、これを移動しないとスクリーンを取り出せない。ところがその箱の重いこと。電源コンセントは黒板の下方にあるのだが、それより高い教壇によってふさがれている。しかた無いので、教壇を壁から数センチ離れた。教壇というのは

重いもの、というより、そもそも教壇で動かせるもの？ それから、学生が唾っている席を移動してもらって、旧式のOHP機器を置かせてもらう。しかし、OHPが机の幅をはみ出し、うまく水平が取れない。ライトを照らしたら、ガラス面を汚れた雑巾で拭いたのか、スクリーンには一面に縞模様が映った。トイレから紙を持ってきてキレイにする。透明シートを映したら画面が小さ過ぎる。が、しかし、ズームスイッチが壊れていたので、このまま授業を進める。次は、液晶プロジェクタで正面のスクリーンに画像を写す。スクリーンは黒板横のスイッチを押せば降りてくるすぐれものだが、惜しいかな、その位置が黒板より1メートル近くもせり出しているので、前列両脇の学生は見づらそう。同時に黒板に何かを書こうとしたが、スクリーンが中央で出張っていて、狭い黒板の字は(少なくとも反対側の半分以上の)学生からは見えない。しかたがないので、スクリーンを元に上げて、説明を書いては、また下ろして…、の繰り返し。また、教壇の幅が黒板の幅ほどしか無いので、端の方に字を書くとき、何度教壇から足をすべらせたことか。しかも、教壇は床に取り付けてあるのではなく、ただ置いてあるだけなので、その上で移動するたびにガタガタと音がする。

こんな調子で、その日の授業は進んで

いったのである。まるで、チャップリンのコメディのようなのだが、これらはすべて本当のことである。このような不具合が気になるかどうかは個人差が大きいようで、ぜんぜん気にしないという方もおられるかもしれない。私はどうかというと、結構許してしまう方だと思っている。というより、授業をいい加減に流してしまうという方向に引いてしまうので、タチが悪い。こんな環境で毎回やっていると、無意識レベルで、教室に行くということが条件反射的にユーウツになってしまったりはしないだろうか。たとえ教員は我慢したとしても、学生への影響はどうだろう？無駄となった時間だけでなく、「やる気を削ぐ」という目に見えない損失は大きいのではないだろうか。

授業アンケートを見るまでもなく、今期、学生からは教室自体の改善、空調、情報コンセント、無線LANなどの整備の要望が殺到している。よい学生を大勢集め、快適な教室環境で迎えたいものである。それには、授業内容も大切であるが、まずは、予算を割いて、設計のよい教室を始めとして、授業環境の物理的改善が必要である。

2. 成績評価の厳格化と授業改善

情報学類では、平成16年度からいわゆる‘成績評価の厳格化と授業改善’のための新方策をスタートした。その骨子は、(1)

安易に評価 A を与えないということ、および、(2) 授業においてクイズやレポートを課すなどしてより綿密な指導を行うこと、の2点である。前者 (1) については、米国の GPA (grade point average) を導入して国際スタンダードに合わせることを企図したが、学群履修規程等の制約もあり、中途半端なものとなった。しかし、幸い学類教員の積極的な協力を得て、目下、かなり厳格な成績評価が実施されつつある。GPA の導入はすでに私学では浸透してきているが、それ以外でも、例えば東大のある学部では優 (本学の A) の割合を 25~35% にするよう枠を設けているなど、先例がある。後者 (2) については、期末テストのみの評価ではどうしても不正確であり、また、予習・復習を促すためでもあるが、本旨は、‘ちゃんと勉強しようよ’ という基本的な意識を持ってもらいたいということである。そのためには、授業のレベルを受講者全体の間あたりに合わせる事が有効と考えられた。つまり、絶対評価でもなければ、相対評価でもない。授業レベルを適切に設定して、丁寧に評価を行えば、おのずと成績は多様になるという考え方である。適正な成績評価は、学生の勉学意欲を刺激するはずと期待している。

今後の課題は、大学院の教育との連動を図ること、e ラーニングの実用、さらに、個

人的には、開設科目を大きく 3 つほどのタイプ (スキルを身につけるドリル型科目、理論や体系や概念を学ぶ理解型科目、自分で問題を設定し種々のコミュニケーションを援用しながら考える科目の 3 つ) に思い切って分類してしまい、授業の実施方法も明確に異なる斬新なやり方で行うのがよいのではないかと考えている。

3. 英語について

‘世界に通じる’ といえ、‘英語’ ということになるかと思うが、個人的には必ずしも本質的とは思っていない。ただ、論文が理解できないのでは、勉強もままならない。また、研究室に留学生がいるケースなど、言葉の障壁ゆえに遠巻きにしてしまい、その留学生につらい体験を味わわせてしまうことはお互いに残念である。このようなことは日本のどこの大学でもめずらしくない光景かと思われるが、そうだとすれば、国家レベルの損失である。

そう考えると、学生に ‘英語力をつける’、というよりは ‘慣れさせる (馴れさせる?)’ という事は、重要かもしれない。これについては、すでに、たとえば某国立大学のある学科では卒論を英語で書くことを義務付けているし、某大学院では、一人でも留学生が受講していれば授業は英語で行うという。また、某大学院のある専攻では、講

義で使用する言語を隔年で日英を交互に入れ替えている。教員も含めて、逃げられない状況を、あえて導入しているわけである。また、国際会議で発表する学生には、旅費を支援するなどの仕組みが学内にあってもよいと思う。

4. そうはいつでも…

上では、「世界に通じる学生」とはどういうものかを明確にしないまま、漫然と思いつくことを羅列してきた。しかし、それらのどの一つもいざ実施するとなると一筋縄ではいかない提案である。しかも、「教室を快適にし」、「世界の成績標準語である GPA を導入し」、「授業を改善し」、そして「英語を怖がらないように」ということが実現されたなら、それで即、世界に通じる学生が育つであろうか？ そうは一概に言えないところから本当の議論が始まるのではないだろうか。たとえば、教室の IT 環境の整備、電子ジャーナルの系統的な充実を含めた学術情報の整備計画の策定、いわく、FD、筑波スタンダード、産学連携とアカデミックフリーダムのバランス、JABEE、…。どれをとっても重要な課題である。これらが総体的かつ丁寧に議論され、果敢に実施されて初めて、その結果の一つとして「世界に通じる学生」が育つことは言うまでもない。

そうはいつでも、この小文で書き切れる

ものではない。上述したような制度的・物理的な改善整備だけでは何か足りない。それは、学生を含めた大学構成員の「やる気」である。それをどう醸成するか？

先に述べたように、「可能性あふれる学生を大勢集めて、素晴らしい教室でしっかり学んでもらうこと」が、まず基本的に重要であり、それが大学のニルヴァーナ境である。そういう意味では、冒頭の「教室の改革」は案外手始めとしては間違っていないのかもしれない。加えて、もう一つの前提要件の「可能性あふれる学生を集めて…」は、入試方法の工夫、すなわち、どんな学生をどのように選考するのか、についての議論も避けられないことを物語っている。

(にしはら せいいち/コンピュータサイエンス専攻・知識工学)